

---

# 爆撃指令

伊藤 薫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆撃指令

### 【Nコード】

N3446M

### 【作者名】

伊藤 薫

### 【あらすじ】

1940年6月、イギリス爆撃航空団はドイツ本土に対する空襲で、失敗に失敗を重ねていた。その原因が、ドイツ軍が設置した高性能のレーダー基地であることを突き止めた空軍参謀ウォレン・バーグ少将は、その基地に対する無謀に等しい爆撃作戦を立案する。その結果、作戦のために特殊部隊が編成され、ロンドン中尉がパイロットとして選抜される。ロンドンはレイチェルへの慕情を抱いたまま、敵地へと飛び立っていく。

## プロローグ（前書き）

### 登場人物紹介

ジェイムズ・ロンドン・・・英空軍中尉。

レイチェル・フランソワ・・・歌手。

ヘンリー・カーティス・・・英空軍中尉。

ジョン・コーンウェル・・・英空軍中尉。

ウィリアム・ウォーレン＝バーク・・・英空軍少将。戦闘機集団参謀。

ロバート・スタントン・・・M I 6 諜報員。

シヨルトー・ダグラス・・・英空軍中将。参謀本部次長。

## ブローグ

「我が内閣の目的は何か？」と問われたら、私はただ一言「勝利！」と答えよう。あらゆる犠牲を払って勝利を得るのだ。どんな恐ろしい目に遭おうと勝利を得るのだ。勝利なくして、我々の生存は有り得ないからだ。

チャーチル 1940年5月3日の下院演説より

1940年8月23日深夜。

軍港ポーツマスより東へ15マイル離れたタングミア飛行場から、戦闘機、爆撃機あわせて30機の航空隊がデンマークに向けて飛び立った。この隊の任務は、ノルウェーとデンマークに挟まれたスカグラツク海峡に浮かぶ孤島に構えるドイツ空軍のレーダー基地を爆撃し、破壊することだった。

与えられた作戦名は「灰」。由来は、ドイツ空軍の「眼」というべきレーダー基地を、「灰」という爆弾で「目潰し」を食らわすという意味だった。

作戦には、ハンブデン・ウェリントン爆撃機6機と、爆撃機の護衛に第43飛行中隊を中心としたハリケーン・スピットファイア24機による部隊が編成された。部隊のパイロットには、イギリス各地から精鋭たちが集められた。

この作戦を発案したのは、英空軍戦闘機集団参謀ウィリアム・ウオーレン・バーグ少将だった。彼は史上最年少で参謀本部に入り、爆撃航空団の作戦本部を務めた後、戦闘機集団参謀に就任した。

部隊の離陸を見届けた後、ウオーレン・バーグは交戦セクターの会議室に閉じこもっていた。椅子に座り、深い思慮を顔に刻ませていた。彼はこのとき、作戦が立案されるまでの日々を思い返していた。

## 第1章：ハイムダル

1940年6月。

ウォーレン・バーグは苦い表情を浮かべたまま、ハルの空軍専門病院の廊下を歩いていた。

昨日のドイツ本土に対する爆撃も失敗に終わり、辛うじて護衛部隊の数人が命からがら帰還したことが判明したからであった。

作戦は、ドイツ沿岸に構える2、3のUボート基地を爆撃することだった。

ウォーレン・バーグはいぶかった。6月に入ってから、ドイツ本土に対する爆撃は敵側に何の損害も与えず、むしろ自国の航空隊の犠牲者が増えるばかりだった。彼は空軍参謀本部に所属しており、爆撃航空団の作戦参謀を務めていた。就任して以来、度重なる爆撃作戦の失敗に、本部の幹部たちは軽蔑をも露わにした目付きを向け始めていた。

病室に入ると、窓際のベッドに横たわる帰還者に近づいた。彼は頭に包帯を巻いて、昨夜の苛酷な爆撃の様子を語り始めた。

「海を渡って、大陸が眼に入った時でした・・・前方から、10機以上の敵機が襲い掛かってきたのです。こちらは、護衛機を含めても8機しかありませんでした。まるで、敵がこちらの機数を把握しているかのように・・・」

「続けたまえ」

「敵のタイミングも・・・実にぴったりでした。ヤツらは私たちの軌道に覆い被さるように、侵入してきたのです。私たちは直ちに反転して、イギリスに向かいました。10機以上の敵機に囲まれたら、一巻の終わりでした。私はスロットルを全開にして、飛行しました。しかし、エンジンが次々と被弾して、ついには機を捨てざるを得なくなりました。・・・どう考えても、ヤツらは私たちの作戦を知っていたとは思えません。そうでなかったら・・・こんなこ

とはなりませんでした」

ウォーレン・バークは空軍省に戻ると、自分のオフィスに入った。革張りの椅子に座った途端、デスクの電話が鳴った。受話器を取ると、直ちに出勤しろと命ぜられた。

ウォーレン・バークが指定された部屋のドアを開けると、鋭い眼光を持った恰幅のいい男が座っていた。

シオルトー・ダグラス中將。参謀本部次長を務めるダグラスは、苦々しく口を開いた。

「昨日の爆撃も失敗したそうだな。どういう訳だね？」

ウォーレン・バークは眼を閉じた。

「答えられないのかね。6月に入ってから、ドイツ本土の爆撃はほとんど成功していない。我が空軍の犠牲者は増える一方で、爆撃隊の士気も下がる。史上最年少で参謀入りを果たした君の技量に、疑問を持たざるを得ない」

ウォーレン・バークは貴族出身の軍人だった。父リチャードは、第1次世界大戦に空軍パイロットとして従軍し、戦功を立てた。少将も父の背中を追って、軍人になり、空軍に入った。

1930年代も中盤に差し掛かると、次第に戦争の空気が立ち込めるようになり、イギリス空軍の脆弱さが露呈された。そこで少将は、空からの侵入に対抗するため、イギリスの海岸各地にレーダー基地を設置して、それに見合う通信網の整備を提言した。この提言が少将への高い評価につながり、史上最年少で空軍参謀本部に入った。

本部に入って最初に任命された仕事は、爆撃航空団の作戦参謀だった。しかし、任命を受けてたった数週間で、度重なる失敗を被ってしまった。

「これはニユーオール参謀長の言葉だが、君の将来を考えて、君を爆撃航空団の任務から外す。今度は、戦闘機集団の参謀に任命する。何か言うことはあるかね？」

「ありません。新しい任務を全うするよう、頑張ります」

「下がりましたえ」

ウォーレン・バークは部屋を辞した。

翌日。ウォーレン・バークは事務引き継ぎのため、オフィスを整理していた。短い間だったが、それまでに発案した計画書のファイルは山のように積みあがった。その山のひとつひとつを段ボール箱に押し込んでいく。机の上に飾ってあった父の写真も一緒にしまった。

その内、ドアにノックがあつたと思うと、男が入って来た。長い黒髪に、褐色の目。顔立ちがどこか北欧系に近い感じのする、ロバート・スタントンだった。スタントンは英国軍部情報部（MI6）に所属し、主にノルウェー・デンマークに潜むレジスタンスを統轄し、ドイツ空海軍の暗号の解読も担っていた。

「ビル、何やってんだい？」

ウォーレン・バークはファイルを箱に押し込みながら、答えた。

「仕事を解任された。今、別の部署に移るために、整理している。

どうした、スタン？」

「ああ。昼時だから、ランチを一緒にと思って……」

ウォーレン・バークが置時計に眼を向けると、12時を差していた。その後、2人で1階の配送部まで段ボール箱を運び、空軍省を出た。段ボール箱は、戦闘機集団司令所と情報中継室になっているベントリー修道院に運ばれる手筈になっていた。

トラファルガー広場につながる通りに面する喫茶店「リリー」に2人は入った。通りにはみ出している鉄製の椅子に腰掛けると、2人はサンドウィッチを頼んだ。食べ終わると、手に付いたパンくずを舐めながら、ウォーレン・バークはコーヒーを啜った。

スタントンがタバコに火を付けた。

「どうして、仕事を解任されたんだ？」

「6月に入ってから、ドイツへの爆撃が一回も成功していない。そ

のためだ」

「なぜ？」

ウォーレン・バーグはコーヒーを啜った。

「原因が分からない。ただ、帰還したパイロットの話を聞くと、ヤツらはまるで待ち伏せをしていたかのように、我々に襲い掛かってきたと」

スタントンは灰皿に灰を落とした。

「6月だろ？ 関連があるのかな・・・」

「どうした？」

「いや、6月に入ってから、ドイツ空軍の交信が増加したんだ」

「どこの地域で？」

「デンマーク・・・その交信は、占領軍司令部に送られるんだが・・・発信先がね、無人島なんだ」

「それは本当なのか？」

「おれも不思議に思っ、て、地元のレジスタンスに連絡を取ったんだが、発信先の島は森だけだという報告を受けた」

ウォーレン・バーグはもう1杯、コーヒーを頼んだ。スタントンはタバコを押し潰した。

「それに、交信の解読もやっかいだ。どうやら、司令部への報告らしいけどな。おそらく、古い北欧言語の単語が交信に混じっている。おかげで、その交信が何を意味するのか、さっぱり分かん」

「解読班がいるだろう」

スタントンは再び、タバコに火を付けた。

「それが、北海と大西洋で活動中のUボート暗号の解読にくぎづけで、空軍の暗号解読班も手伝っている状況なんだ」

ウォーレン・バーグは2杯目のコーヒーを啜った。

「どういった単語なんだ？」

スタントンは友人の顔を見た。

「<ハイムダル>だ」

ウォーレン・バーグは考え込んだような表情をしたと思うと、突

然、口を開けた。

「くハイムダル」というのは、北欧神話に登場する神々の1人だ。何千フィートの先まで、見渡せる千里眼の持ち主だ」

「詳しいな」

少将は笑った。

「母親はスウェーデン人なんだ。子どもの頃、よく聞かされたよ」  
スタントンは2本目のタバコを灰皿に押し潰した。

「じゃあ、一体どういうことなんだ？千里眼とは？ますます、意味が分からん」

「もし、よかつたら、交信の傍受記録を見せてくれるか？」

ベントリー修道院に向かうと、まず戦闘機集団最高司令官ヒュー・ダウディング大將に挨拶した。その後、第11飛行群司令官キース・パーク少將、参謀部の事務官らに挨拶した。自分に与えられた部屋に入ると、すぐにMIEからのプレゼントが届いた。

ウォーレン・バーグは段ボール箱から、自分が発案した爆撃作戦の実行期日と、スタントンから届けられた交信の傍受記録の期日を照らし合わせた。

予想した通りだった。爆撃作戦が失敗に終わった日は、必ず無人島からコペンハーゲンの占領軍司令部に、交信が行われていた。おそらく、事務報告に偽装して、「敵機来襲」を司令部に「報告」しているのではない。

ウォーレン・バーグの脳裏に、ある疑念が浮かんた。

（無人島、すなわちくハイムダルは、航空用レーダーなのではないか・・・？）

## 第2章：犠牲

夕闇に沈むスカラッグ海峡を、1隻の漁船が航行していた。薄暗い船倉の中で、スタントンは魚群探知用のビーコンに向き合っていた。彼はそのアンテナをライトの上に括りつけ、周波数を敵のレーダー基地の波長に合わすため何度も変化させていた。ふと、イヤホンから雑音が響いた。

「おい、止まれ！」

スタントンは上にいる船員に怒鳴り、ビーコンの周波数を書き留めた。上から男が顔を出し、紙切れを手渡した。それには船の現在位置とアンテナの角度が書かれていた。スタントンは北海の地図を取り出し、位置と角度を確認した上で線を引いた。後に、これを2回繰り返し、スタントンはその結果を地図に反映させた。描かれた3本の線は1点に集中していた。

デンマーク領ビョルグ島。

闇夜に溶け込むようにして、黒いゴムボートが島に向かって走っていた。静かに浅瀬に乗り上げると、乗っていた3人の男たちはボートを岩瀬の近くに係留した。各自で装備を確認した後、身を低くして森の中に入っていった。彼らはスタントンからこの島の再調査を指令されていた。指令を聞いたとき、彼らは不思議に思った。

「ミスター・スタントン。あの島は無人島ですとこの前、報告したじゃありませんか？」

「でも、その時の報告では岩山があつて、それ以上は調査できなかっただろう」

3人は押し黙った。

島は深く森に覆われ、険しい谷や沼地が数多くあった。確かに、島の位置はデンマークよりもノルウェーに近く、大西洋に向かうウボートや空軍の基地としては最適だった。しかし、ほとんど手付かずの自然が広がっており、大きな岩山もあつて、3人はこれでは基

地の整備に時間がかかるとドイツ軍が放置しているのだろうと勝手に判断を下していた。

「ビーコンの反応は間違いなくあの島をさしているのだ。何かが発見できるまで、絶対に報告してくるな！」と、スタントンは喝を入れた。

しばらくすると、3人の前に岩山が立ちはだかった。1枚岩で、高さが20メートル近くあった。3人は丈夫な縄で互いを繋ぎ、ブーツの足先にかぎ爪を付けた。指を掛け、足場を探しながら、ゆっくりと登っていく。岩の表面はコケで覆われ、ときどき手足が持っていられることがあった。

どうにか登り終えると、3人はその明るさに驚いた。上も深い森で覆われていたが、その木々の間から強烈な光が漏れていた。3人は茂みに身を隠しながら、その光に近づいた。森が途切れると、3人は眼をみはった。

強い光の正体は、随所に置かれた投光機だった。灰色に塗られた巨大なドームが寄り添うように立っており、その一つは天蓋を開けていた。そこから、大きい鉄格子のようなアンテナが姿をみせ、ゆっくりと旋回していた。哨戒用の戦闘機が滑走路に止まっており、その近くにボールのような燃料タンクがあった。高射砲が投光機とドームの近くに置かれ、何人もの兵士が巡回していた。

#### 空軍省の作戦会議室。

ウォーレン・バーグはニューオール参謀長をはじめとする会議の出席者に、写真を配布するよう係員に頼んだ。その写真は不明瞭ながら、レーダーのドームを写していた。

写真を手にしたダグラスが口を開いた。

「これがレーダー？」

「場所はスカラッグ海峡の孤島です。三日ほど前、この島に潜入したレジスタンスがこれを発見しました」ウォーレン・バーグが言った。

戦闘機集団から来た参謀が口を開いた。

「でも、この島は無人島だと報告されていたのはなかったのかね？」

「我々は島の地形に騙されていました」

ウォーレン・バーグは黒板を引き寄せ、チョークで島の外形を描いた。

「前回、大きな岩山にぶち当たって調査を中止していました。岩に登るための装備を持ち合わせていなかったためです。今回、レジスタンスは岩山を越えてこの写真を撮っています。ですから・・・」

ウォーレン・バーグは島のほぼ中央に線を引いた。

「岩山が東西に伸びていたのです。デンマーク側は森林と沼地だけです、ノルウェー側から見れば、レーダー基地ということになります」

ダグラスが驚いた表情を浮かべた。

「信じられん・・・！」

「でも、これがレーダー基地だという保証は？敵の大掛かりな偽装かもしれない」戦闘機集団の参謀が言った。

「その点は大丈夫です」

スタントンが口を開いた。

「敵は去年の12月頃から、あの島に多くの建設用の重機や、コンクリートなどの資材、電子機器などを運び入れていたようです。デンマーク国内の船舶業者から聞いた話ですが」

「でも、あの島はデンマーク領ではなかったのかね？」ダグラスが言った。

「そこは、ヒトラーの大嘘ですよ」

スタントンはため息を付いた。

「ヒトラーはデンマークに、ビョルグ島とシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方を天秤にかけさせたんですよ。あの島を手放したら、長年両国の懸念となっている地方を帰してやってもいいとも言ったんでしょう。その内心では、両方とも占領する心積もりだった」

ウォーレン・バーグは一同を見渡すように言った。

「このレーダー基地が、我が国のドイツ本土爆撃に対する最大の障害物であることは言うまでもありません。即刻、爆撃隊を編成してこの基地を破壊すべきです」

爆撃機集団の参謀の1人が口を開いた。

「私たちはこの作戦には大賛成だが、要するに敵地のだ真ん中に突っ込むわけだ。それには、何十機かの戦闘機を護衛に付けてほしい。ダグラス次長、予備の戦闘機は貸していただけるのかね？」

ダグラスは断固といった調子で答えた。

「戦闘機は1機も貸し出せない。予備は全て出払っていて、連日出動に追われている。いまましいゲーリングの空軍が制空権を奪おうと勢い込んでいるときに、本土を守る迎撃用の戦闘機がいなくてどうする？」

「それでも、全ての交戦セクターが襲われるわけではありません。最も戦闘が激しいのはロンドン周辺とウェールズ沿岸だけで、スコットランド方面の部隊の稼働率はさほど高くありませんから、うまくやり繰りすれば、20機ほどは抽出できるはずです」と、ウォーレン・バーグは言い返した。

「爆撃隊にとつては確かに、ドイツ本土に対する爆撃は重要だ。しかし、戦闘機にとつては本土防衛が第一だ。本土の防衛能力を削つてまで、レーダー破壊のために戦闘機を抽出することは、現状では無理だ。第一、この作戦に何の意味があるのか？レーダーを破壊することによって、敵の我が国に対する空襲がなくなるとでも言うのかね？」

「将来にとつては必要なことです。ヒトラーが世界中のどこまでを侵略するつもりか分かりませんが、その兵力は無限ではないはずですよ。さらに、我が国がドイツ本土に対して空襲することが、ヒトラーの兵力を減らすことにつながります。大きなものを外部からではなく、内部から突き崩していくことが今からでも必要なのです」

ダグラスはウォーレン・バーグを睨みつけた。

「君は将来の作戦のために、我が国が空襲にあっても良いとでも言

うのか！」

それまで静かに話を聞いていたニューヨーク参謀長が、2人を制するように手を挙げた。

「2人の意見はどちらも一理ある。私は正直に言つて、ダグラス次長の意見に賛成だ。だが、チャーチル首相はベルリン爆撃を望んでいる。ヒトラーの軍隊はフランスを攻め落とそうとしている。アメリカはまだ宣戦する気配もない。すると、残るはソ連だが、首相は共産主義を嫌つておられる。実質、我が国だけがヒトラーを倒さねばなくなる。何かを成すには、それなりの犠牲が伴う。我々は勝利へ向かつて突き進まなければならない。勝利のために我々が払った犠牲を判断するのは、未来の人々の仕事だ。私は将来の勝利のためを思う」

7月中旬、ウォーレン・バーグ少将が立案した「灰」作戦は認可された。爆撃航空団から6機のウェリントン・ハンプデン爆撃機を借り受け、彼は戦闘機集団の参謀業務を務めながら、爆撃機護衛のためのパイロットを探した。

タングミアー。暗くなった作戦会議室の中で、ウォーレン・バーグは立ち上がった。外に眼をやると、月が大きく顔を出して、会議室にも月光が差し込んだ。彼は窓際に立ち、1人のパイロットを思い出した。いつも静かな眼をした男だった。

彼はその男 ジェイムズ・ロンドンに向かって小さく問い掛けた。「君は悪魔に勝てるだろうか？」

### 第3章：宿命

ジェイムズ・ロンドン中尉はハリケーンに揺られながら、北海をデンマークに向けて飛行していた。北海の闇夜は月明かりから微塵も暗さを感じさせなかった。彼の右側には、巨体を誇る爆撃機のエンジンが落ち着いた様子で唸りを上げていた。

ロンドン前方のスピットファイアに視線を移した。機体間の距離を合わせると、軸線が少し左にずれていることが分かった。操縦桿の微妙な調節によって軸線を合わせるのだが、援護隊の戦闘機はこの作戦のために改装が施され、操縦桿がいつもより重たく感じられた。

今回、「灰」作戦に参加しているハリケーン、スピットファイア全機には燃料タンクの拡充が行われた。さらに、切り離し用の補助タンクも大型化され、機体の重量が増していた。

短い練習期間に慣れない操縦が重なって、ロンドンは少し気分を害していた。機体がぶれないように操縦桿を握り締めながら、数週間前のことを思い出していた。

1940年7月。

第2次世界大戦の火蓋が切って落とされて約1年が経過した頃、イギリスはドイツ空軍から脅迫を受け始めた。これが、英独による制空権の争奪戦「バトル・オブ・ブリテン」の始まりだった。

8月1日。

ベントリー修道院に設置された情報中継室に、東海岸沖を航行している輸送船団から敵機発見の報せが入った。敵機は進行方向から見て、ノーリッジに向かうと見られ、情報中継室はイギリス中部のウットノールに構える第12飛行群司令部に連絡した。

第12飛行群司令部は直ちにダックスフォード交戦セクターに第19飛行中隊の出撃を要請した。ベントリー修道院の通報から約5

分後、5機のスピットファイアがダックスフォード飛行場から離陸した。

この報せは、ロンドンが所属する第17飛行中隊を支配下に置くデプデン交戦セクターにも伝わり、デプデン飛行場からも5機のハリケーンが出撃した。この日、ロンドンは出撃せず、他の仲間とともに次の出撃要請を待っていた。

ダックスフォード、デプデン飛行場から離陸した10機の戦闘機はノーリッジ上空で落ち合い、北海の輸送船団に急行した。

この時、ダックスフォードから離陸したパイロットの1人、ジョン・コーンウェル中尉は色めき立っていた。なぜなら、彼はロンドンの姉であるエリザベスと結婚しており、文字通りジョンとジェイムズは兄弟のような付き合いをしていたからだ。ジョンはしばしばデプデンのハリケーン部隊に話し掛け、ジェイムズがいるかどうか探したが、再会は果たせなかった。

この出来事をデプデンから派遣されたヘンリー・カーティス中尉は記憶に留めていた。

10機の戦闘機が輸送船団を視認すると、進行方向2時に約10機のメッサーシュミット110とユンカース88爆撃機が現われた。直ちに、イギリス戦闘機隊は右に機首を回しながら高度を上げ、上手くドイツ機隊の後を取ることに成功した。イギリスの先頭機がドイツ機の中へ急降下を開始し、ブローニングの機関銃が火を噴いた。銃弾はユンカースの装甲を貫き、燃料タンクから火を噴きながら北海に墜落した。先頭機のパイロットが歓声を上げたのを皮切りに、他の戦闘機もドイツ機の中へなだれ込んだ。

メッサーシュミットとユンカースは直ちに散開し、戦闘態勢に入った。

空戦は激烈を極めた。包囲された敵機が全速力で脱出を図ったが、敵わなかった。ブローニング機関銃が炸裂し、主翼が吹き飛び北海に没した戦闘機もあった。

戦局は圧倒的にイギリスが優位だった。しかし、1機のユンカー

スが銃撃を受けて、瞬間的に炎に包まれた。白煙を引いて錐揉み状に落下した際、1機のスピットファイアに激突した。2機とも炎に包まれ、北海に墜落してしまった。

その後、1機のメッサーシュミットを逃したのを最後に空戦は終わりを迎えた。味方の損失は、不運にも落下中のユンカースの激突されたスピットファイア一機のみだった。

9機の戦闘機は、各々の飛行場に帰還した。デプデン飛行場の滑走路には、ロンドンをはじめ多くのパイロットが味方の帰還を待っていた。夕日の淡い光の中に、5機のハリケーンの機影が見えると、彼らは歓声を上げた。

ハリケーンは無事着陸し、ロンドンは機から降りたカーティスに近寄った。カーティスは防眼レンズを外した。

「どうだった？」と、ロンドン。

「ああ、余裕さ。相手のパイロット、泡食っちゃってね。あつと言う間だった、オレも2、3機落としてやったさ」

「損失はあったのか？」

カーティスはスカーフを外し始めた。

「ああ、ダックスフォードのスピットファイアが1機落とされたんだ。ありゃあ、不運だぜ。何せ、撃墜されたユンカースに激突されて一緒に海に落ちたんだ。そっぴや、スピットファイアと言えば、1人お前のこと知っているヤツがいたぜ。確か……コーンウェルって言ったかな？」

「コーンウェル？ああ、オレの姉貴の旦那だけだな」

カーティスは声を低くして言った。

「もしかしたら、落ちたスピットファイアに乗っていたのは、お前の兄貴かもしれないぜ」

8月3日。

北海を航行していた輸送船団は、フラムボロー・ヘッド岬の沖合で、1人の遺体を引き上げた。遺体は海水で腐食されぶくぶくと腫

上がっていたが、軍章が見つかり、第19飛行中隊所属のジョン・コーンウェル中尉を判明した。

8月4日。

船団はボードジーに到着し、遺体はダックスフォード飛行場に搬送された。

ジョン・コーンウェル中尉の葬儀は、ダックスフォード市内の聖パウロ教会で執り行なわれた。葬儀にはコーンウェル、ロンドン両家の家族が一堂に会した。ジョンが入れられた棺の前には献花台が置かれ、喪服を着た人のほかに緑色の軍服に身を包んだ者まで花を添えた。

ジェイムズは教会の入口に立っていた。彼は子どもの頃から、教会の冷たい雰囲気をも嫌いし、葬式になると尚更だった。イギリス空軍航空中尉の制服に身を包んだ彼に、多くの弔問客が頭を下げた。空は重く雲が垂れ込み、彼の眼と同じ灰色をしていた。夏とは思えない乾いた風が彼の黒髪をなびかせる。すると、前の通りにビュイックが停まった。車から出て来たのは、喪服に身を包んだレイチエル・フランソワだった。レイチエルがうつむいていた視線を上げた時、教会の入り口にたたずむジェイムズの姿を認めた。彼女は再会が嬉しくてたまらなく顔をほころばせたが、厳粛な葬儀の雰囲気になんとも少し顔を下げた。

ジェイムズはゆっくりと石段を降り、幼なじみの様子を観察した。赤らめた頬に、美しいブロンドの髪、ヒスイのような深緑色の瞳。体格は少し細かったが、ラインは曲線美を示していた。戦争が始まってすぐにロンドンとコーンウェルはイギリス軍に志願した為、ジェイムズにとってもレイチエルにとっても1年半ぶりの再会だった。一方、レイチエルはその美貌と朗らかな歌声をかわれ、ソプラノ歌手になった。ロンドンでは飛行場のラジオで何度か歌声を聞いたことがあった。

「レイチエル！来たのか、よく時間あったな」

2人は連れ立って教会に入った。レイチエルはエリザベスの隣に

座った。ロンドン家とフランソワ家は両家が隣同士で、家族と同様の付き合いをしていた。ジェームズは子どもの頃、よく3人で遊んだことを思い出した。

レイチエルは事故の様子を聞いて、とてもショックを受けたようだったが、彼女はすぐにでも出なければならなかった。彼女は両家の家族に頭を下げて回り、入口に立っているジェームズとともに車に戻った。

「ごめんね、最後までお手伝いできなくて……」

「いいよ、お前はいつだって忙しいんだから。今日も歌うんだろ？」  
「ジム……」

2人の視線が絡み合った。レイチエルは何か言いたげだったが、「なんでもない」と言うつとビュイックに乗った。

車は走り出して、大通りの雑踏に消えた。その後を見ていたロンドンの右肩に何かが当たった。その方を見ると、1人の男が立っていた。男は緑色の軍服に身を包み、ロンドンには男の階級章から自分より上官だと即座に分かった。彼は謝る前に、姿勢を正し敬礼した。  
「失礼しました……！」

「いやいや、手を下ろしたまえ。こっちも悪かったね」と、男は優しい口調で言った。

男は青い眼をしており、帽子に隠れてよく分からなかったが、どうやら金髪らしい。貴族のような上品な顔立ちをしていた。

2人は揃って挨拶すると、軍服の男は名乗らず教会の本堂へと消えた。

ロンドンは男の上品な顔立ちが忘れられなかった。

## 第4章：生死

8月7日。

デブデン飛行場に戻ったロンドンは、通常通り航空訓練に参加した。空は厚い雲に覆われ、いやな湿気がハリケーンの狭い操縦席に充満した。

訓練を終えて、滑走路に降りたロンドン是真っ先に蛇口に飛びついた。喉を潤して、蛇口を止めたロンドンの視界に2人の男が入った。

1人は飛行場の隊長を務めるチャールズ・フォレスター大佐だった。フォレスターは戦闘機乗りとは思えないほど肩幅が大きく、鼻の下にある小さな髭がトレードマークだった。

フォレスターの隣を歩く、将校用の灰色のコートに身を包んだ男にロンドンは見覚えがあった。数日前のコーンウェルの葬儀で見かけた上品な顔立ちをした男だった。

ロンドンは将校に向かって頭を下げた。

「その節はどうも」

「やあ・・・」

「義兄の葬儀にいらつしゃいましたね」

2人の親しげな様子に驚きながら、フォレスターは将校に言った。「改めて説明する必要もなさそうですが、彼はこの基地のエース、ジエイムズ・ロンドン中尉です」

「よろしく」ロンドンは頭を下げた。

「ほう、彼がエースですって？」

フォレスターはヒゲをいじりながら、答えた。

「ええ。彼はこの基地に配属されてから、優に60機以上は落としていますよ」

将校は驚いた表情を見せた。ロンドンはあまり自分のことを言われるのは嫌いだったので、渋い顔をしていた。フォレスターはロン

ドンに言った。

「で、ロンドン。こちらは空軍参謀部のウィリアム・ウォーレン・バーク少将だ。確か、先日までダックスフォード交戦セクターに居たんでしたな？」

「ええ、彼の義兄であるジョン・コーンウェル中尉は私の部下でした」

ロンドンはあることに納得した。「ウォーレン・バーク」と言えば、名のある貴族の名前であった。少将の上品な顔立ちも頷けることだった。だが、将校がわざわざ一中尉の葬儀に出席してくれるとは、どこか軍人らしくない面もある。

「コーンウェルはいい人間であり、軍人であった。だが、いいパイロットでは無かったようだ・・・」

「何ですって？」ロンドンが言った。

「彼は魔物に喰われたのだ。戦いの場における一秒という悪魔に」ウォーレン・バークは苦々しく口にした。彼らはロンドンの元を離れ、デプデン飛行場の他の施設を視察して回った。

その日の夕方、ジェイムズはダックスフォードに住む姉の元を訪れた。姉は突然の来訪に少し驚いたようだったが、彼女は弟を居間に案内した。居間のテーブルの上には、夫の写真が置かれていた。ジェイムズはそれを戸棚の上に移して、ガラス戸を開けた。

エリザベスは台所からリンゴと果物ナイフを持って来て、ソファに腰掛けた。

ジェイムズは戸棚のラジオのスイッチを入れた。ダイヤルを調節すると、電氣的なノイズからピアノの音色と美しいソプラノが響き始めた。

エリザベスはリンゴの皮を剥きながら、言った。

「今日もレイチェルは歌っているのね・・・」

ジェイムズはソファに戻ると、聖歌が始まった。豎琴を連想させるピアノの音色が響き、レイチェルが静かな祈りの歌を謳い始め

る。

アヴェ・マリア、やさしき処女……。

ジェイムズは聖歌に耳を傾けながら、タバコに火をつけた。薄青い煙が部屋に舞い上がる。エリザベスはリングを小皿に乗せ、口を開いた。「ねえ、ジム。レイチエル、心配してたわよ。あなたもジョンと同じ目に遭うんじゃないかって……」

彼女の仄暗い瞳は、悲しげに光っていた。ジェイムズは答えられず、ジョンが愛用していたガラス製の灰皿にタバコを押し潰した。彼はため息をつき、姉の顔を見た。彼女の眼は自分の顔に注がれており、口を真一文字に結んでいた。ジェイムズは呟くように言った。「姉さん。そうした心配は一切、何の役にも立ちやしないんだ……！これは、運命なんだよ。いや、宿命というべきかな？いい歳した大人が、殺し合いをしているんだ。まるで、マクベスのような気分だ。ほら、あるじゃないか。『やがては私も死なねばならなかった。そういう報せを受ける日が、いつかはやって来るのだ。明日か、また明日か、そのまた明日かと、時は1日1日とわずかな足取りでやって来る。そして、とうとう時の記録の最後の一文字に達する……』」

「あなたは怖くないの……？」

「そりゃあ、怖いよ。でも、それはオレだけじゃない。ジョン義兄さんだって、オレの仲間だって、それに向かってくるドイツの野郎どもも同じさ。誰もが背負っている。不安を、恐怖を。そして、死を」

エリザベスは耐え切れなくなつて、急に顔を背けると泣き始めた。感情的でなく、静かで穏やかな泣き声が部屋中に伝わった。ジェイムズは姉の体を支えると、寝室に連れて行つた。「今は休息が一番だ」と言い聞かせて、エリザベスをベッドに寝かせた。

ジェイムズは姉が落ち着いたことを見ると、重い足取りで家を出

た。  
ため息を付くと、ふとレイチェルの顔が頭の中に浮かんだ。

## 第5章：任務

8月9日。

ロンドンとカーティスは列車に揺られながら、ポーツマスに向かっていた。乗客に溢れた狭い車中で、ロンドンは軍服の胸ポケットから受け取った辞令を取り出した。

「辞令 第17飛行中隊所属、ジェイムズ・ロンドン空軍中尉ならびヘンリー・カーティス空軍中尉はタングミア交戦セクターに集合されたし。両氏は、この度特殊作戦の任務を命ぜられた。そのため、両名は第17飛行中隊から第112混成部隊に転属された」

何度見返しても、腑に落ちない指令書である。まず、特殊作戦の内容は全く触れられていなかった。次に転属先の第112混成部隊の名前も気に食わない。混成ということは、他の同盟国の軍隊とともに作戦を行うということなのか。

ロンドンが指令書を睨んでいる内に、蒸気機関車はリヴァプール・ストリート駅に到着した。彼らは多くの乗客とともにプラットフォームにはじき出された。彼らはテムズ河を渡り、ウオータールース駅からポーツマス行きの列車に乗り換えた。列車の窓から見える不安や慄きに満ちた首都ロンドンの光景は、何か2人の息を詰まらせる重苦しい感情を与えさせた。

ポーツマスに到着すると、タングミアから派遣された下士官がジープに乗って2人を待っていた。やがて、遠巻きに飛行場を囲む鉄条網が見えると、巨大な格納庫に爆撃機が6機ほど検査を受けていた。

ジープが交戦セクターの入っている建物の前に停車すると、建物の出入り口にウォーレン・バークが立っていた。ジープから降り立ったロンドンは、敬礼した。

「お久しぶりです、少将」

「遠路はるばる大変だったね。早速だが、奥の会議室で打ち合わせ

があるんだ。ついてきたまえ」

荷物は指定の宿舎に運ばれ、会議室に入った2人に大勢のパイロットが待ち構えていた。各々が吸うタバコの煙で、会議室は薄青い空気に満たされていた。黒板の近くには、爆撃機のパイロットが固まっていた。2人が空いているパイプ椅子に腰掛けると、会議室にウォーレン・バーグが続いて、顔に切り傷の入った男が入って来た。談話はすぐに止み、ウォーレン・バーグが椅子に腰掛けると、男が机に両手をつけて話し始めた。

「君たちに集まってもらったのは他でもない。君たちは辞令に記している通り、ある特殊作戦に従事してもらう必要がある。私は、作戦の指揮を執るデイヴィット・ルーカス大佐だ。右手におられるのは、空軍参謀部から派遣されたウィリアム・ウォーレン・バーグ少将だ」

ウォーレン・バーグは椅子に座ったままだったが、頭を垂れた。

そのため、会議室に集まったパイロットたちも頭を下げなくてはならなくなった。ルーカスは黒板に、大判のヨーロッパ地図を貼り付けた。

「君たちが今回の作戦で行うのは、デンマーク領の孤島に構えるドイツ空軍のレーダー基地を爆撃することだ」

この言葉に、会議室にいた全員が凍りついた。デンマークはドイツの支配下であり、さらにフランス、ノルウェーまでも占領されている。フランスのパリ、ベルギーのブリュッセル、ノルウェーのオスロにはそれぞれ第2航空軍、第3航空軍、第5航空軍が待ち構えており、第2・第3航空軍に至っては、1000機以上のメッサーシュミットに1400機近いユンカースやハインケル爆撃機もの兵力を保持していた。このような状況下で、24機の護衛用戦闘機と6機の爆撃機で敵地のレーダー基地を爆撃することなど、正しく「飛んで火に入る夏の虫」と同じことだった。

パイロットの1人が手を挙げた。

「あまりに無謀過ぎると思います。今回の作戦に一体、どんな意

味があるんですか？」

「この作戦の大きな意味は、制空権の奪取だ。現在、我々は7月以来、敵に攻められてばかりで、未だドイツ本土への本格的な空襲を行えたことは無い。我々がレーダー基地を破壊し、制空権を完全に奪取した暁には、ベルリン空襲が可能になるのだ」

ルーカスは高らかに宣言した。ウォーレン・バーグが咳払いをすると、厳かな口調で述べた。

「チャーチル首相も非常にこの点を憂慮されていた。今回の作戦によつて、悲願のベルリン空爆が実現されるならば、非常に惜しいことだが、多少の犠牲は無くしてはならない。そうおっしゃっていた。しかし、現在、我々が手にしている目標の情報はとても信頼性の高いものだ。MIEがデンマークのレジスタンスと綿密な連絡網を形成し、目標にも潜入して、情報が作られている。さらに、君たちは精鋭のパイロットたちだ。必ずやレーダー基地を壊滅し、再びイギリスのこの土を踏めると信じている」

パイロットの1人が諦めたような口調で、質問した。

「出撃はいつですか？」

「8月の下旬、約2週間後を予定している」と、ルーカスが言った。

翌日から訓練が始まった。

今回、爆撃機の護衛を務めるハリケーン、スピットファイアには張り巡らされたレーダー網を掻い潜るため、これまでにない特殊な隊形を組むことになった。ルーカスを隊長として、連日、隊形の確認が続いた。また、敵に攻撃を悟られないよう、交戦セクターから出撃要請があつても本部隊、すなわち第112混成部隊は出撃しないことが取り決められた。

デンマークまでの決死行のために改造された戦闘機に、パイロットたちは辟易していた。通常の機体に比べ、2割にも増したその機体を思うように操縦することが出来ず、隊形を形作れないでいた。さらに、出撃できないことがパイロットのストレスを増大させた。

ロンドンが家族に、デンマークへ飛ぶことを告げた。両親は黙ってうなずき、姉はまた泣いた。レイチエルには、姉が伝えると言っていたが、果たして伝えただろうか。たった数時間の訓練が、一生分の時間が過ぎたような気がしてならない。不眠が続き、彼の眼は次第に落ち込んでいった。

食堂。ロンドンは一人で昼食を食べていたが、向かいの座席にウーレン・バーグがコーヒーを手に持って現われた。彼は終始俯いたようだった。

「また、1人辞めましたよ。君の調子はどうです？」

思うようにならない訓練に辟易し、ストレスが極限にまで達したパイロットは辞めるしかなかった。最初の内は、死にたくないという理由で辞めていく者が多かったが、次第に作戦そのものに疑問を感じ、辞める者も始まった。募集した人数から半数近く部隊から去り、部隊の士気もどこか停滞気味だった。

「訓練している最中は、どうしてこんなに苦しいんだろうと思って、リタイアしたくなるんですが、不思議ですね。リタイアって思うと死んでも死に切れないと思ってしまふんですよ」

「我々が行う作戦に費やす時間は、たった24時間だ。たった24時間の内に、全てが終わる。しかし、その時間は天使によって与えられるか、悪魔によって与えられるかは、人それぞれだ。君の義兄さんは、悪魔によって時間を与えられ、悪魔に喰われたのだ」

ウーレン・バーグは言葉を切ると、コーヒーを口に含んだ。

「君はドイツ空軍が、我々が破壊するレーダー基地を何と呼んでいるか？それは、<ハイムダル>だ。知っているかね？」

「<ハイムダル>・・・たしか、北欧神話に出てきますよね。千里眼を持つんでしたっけ？」

「詳しいじゃないか？」

「母方はフィンランドの家系なんです」ロンドンは笑った。

「どこかで聞いたような台詞だな」

少将はコーヒーを啜った。

「その通り、そのくハイムダル」がどこにいるかと言えば、虹と呼ばれるビフロスト橋だ。この橋を渡ると、何があるか？神々の国アスガルドだ。そして、神々の宮殿……」

「ヴァルハラですね」

「そうだ。それがベルリンなのだ。私たちは言ってみれば、正に巨人族だ。この城を何としても攻めなければならない。この作戦にいたい、何の意味がある？その答えは、ベルリン空襲なのだ……！」

ウォーレン「バーグは歯を食いしばるように言った。

## 第6章：爆撃

8月23日深夜。

雲の切れ間から月光が差し込む北海の闇夜に、マーリン・エンジンの落ち着いた、脈打つような震動が伝わる。

ロンドンは首を伸ばして海の様子を見たが、海は波ひとつ立たず落ち着いていた。まもなく無線の周波数を変えるよう指令が入り、ダイヤルを回した時、無線から妙なノイズが入ったと思った。

その時、ロンドンの左翼に広がる雲から突然、黒光りした双発の戦闘機が上空から飛び出した。彼はその胴体に描かれた黒十字がしつかりと見えた。

飛び出したメッサーシュミット110の機関銃が火を噴き、中心と右翼を飛行していたウェリントンの胴体を貫いた。その後、2機続き、周辺の爆撃機を襲った。

即座に、無線が混乱した。右翼を飛行していたハリケーン・スピットファイアは敵機の迎撃態勢に入った。敵機は編隊の上空を横切り、大きく旋回して、前列に並んだハンブデンに狙いを定めた。

迎撃に入ったハリケーンの1機が果敢に敵機の中に突入すると、メッサーシュミットの1機を北海に沈めた。残りの2機をスピットファイアで追撃したが、敵の1機が上手く追撃から逃れ、ハンブデンに迫った。

護衛機が出払ったハンブデンの胴体はがら空きだった。ハンブデンに取り付けられた防御用銃座の機関銃が火を噴いた。20ミリ弾は敵機のパイロットに当たり、メッサーシュミットはコントロールを失った。

メッサーシュミットは右翼を飛行しているウェリントンをすれすれに回避すると、中心を飛んでいたハンブデンの上部を削り、左翼のウェリントンの胴体と右翼を、鋼鉄の翼で引き裂いた。

闇夜に鉄の軋む音が響き渡った。戦闘は終わり、残された1機も

スピットファイアによって北海に沈められた。部隊の被害は、護衛機は無し。爆撃機は被弾が3機、大破と報告したのは1機だった。

大破した機体の損壊は著しく、機長は鉄が喚いていると、報告した。後部の隊員がパラシュートで脱出しようにも、ハッチが壊れて開かなかった。右翼は半分以上も胴体から裂かれ、その為、燃料パイプが切断され、燃料が漏れ始めていた。

次第に、損壊したウェリントンは部隊から遅れるようになった。

ロンドンと2機が部隊からはなれ、護衛についた。すでに部隊はオランダの沖合を飛んでおり、引き返すにも距離が遠すぎた。ウェリントンの悲痛な飛行は続いた。機体の高度は徐々に低下し、パラシュートの安全開傘高度を切った。ロンドンの無線に連絡が入った。「こちら、グリーン4。どうぞ」

「本機は着水する・・・！君らとともに、デンマークへ飛べないのは非常に残念だ。どうか、必ずドイツ野郎どもをやっつけてくれ！君たちと飛べたことを誇りに思う」

無線が切れた後、機体は徐々に海面へと近づいた。何とか高度を保とうとする姿が、何か大きな力に対して必死にあがいているように見えた。その時、裂けていた右翼が轟音とともに胴体からもげて、海に落下した。その後、機体はもげた右翼から海水に入り、大きな水柱を作って沈んだ。

ロンドンは無線のスイッチを入れた。

「こちら、グリーン4。レッド1、応答せよ」

「こちら、レッド1。どうぞ」とルーカスが言った。

「大破したウェリントン、海水に着水しました。3機は部隊に戻ります」

「了解、レッド1。ごくろうだった」

3機は機首を上げると、速度を上げて部隊に戻った。

北海を包んでいた闇夜は、次第に白んできていた。東の方角から淡い光が放たれ、時折機体に反射して輝いて見えた。無線から補助タンク投下の報せが入り、戦闘機から銀色のタンクが北海に投下さ

れた。これで護衛機の重量は軽くなり、自然に部隊のスピードは上がった。

北海に太陽が昇り、柔らかな朝日に包まれた。

「こんな朝日が二度、見られるだろうか？」

ロンドンは、ふとそうしたことを思った。

その時、耳に爆音が響いた。淡い日光の中に、黒や灰色の雲が浮かび始めた。ルーカスの声が無線から怒鳴った。

「11時方向、高射砲！目標、接近！」

ロンドンは視線を落とすと、朝日や北海の青さの中に、デンマークの美しい田園の緑が冴え渡っていた。なだらかな森林と険しい岩山を背景に、無機質な灰色のドーム型の建物が姿を現した。

基地では、昨晚、第3航空隊に所属する3機が哨戒している際に約20機以上に及ぶ敵の部隊を発見。迎撃に入ったが、撃墜されてしまったという報告を受けていた。レーダーの画面には、すでに敵の部隊の機影が映っており、直ちに第5航空隊に応援を要請した。高射砲部隊は飛行機を視認すると、即座に高射砲の引き金を引いた。轟音を上げて、鉄弾が飛び出し、隊員の体が揺れた。

「レッド1から、全機！目標上空まで、あと十分。第112混成部隊の意地を見せ付けてやるんだ！」

その時、ロンドンは朝日に輝く敵機の姿を目撃していた。

基地から要請を受けて、迎撃に駆けつけたメッサーシュミットだった。

即座に、ロンドンと2機が迎撃に入った。

ロンドンは右から左へ敵の編隊を横切るように飛行し、機関銃の引き金を引いた。その後、敵機の攻撃をかわしながら、右に旋回し、相手の後ろを取った。敵機は逃走を図ったが、機関銃の弾は燃料タンクに命中し、機体は炎に包まれ、基地に墜落した。残りの機も同じ運命を辿ったが、1機は基地の弾薬庫に墜落して、一瞬眼も眩むような火柱が轟音とともに屹立した。

部隊は目標の上空に入り、6機の爆撃機は弾薬庫の扉を開けた。

息の詰まるような緊迫感の中、約2万トンに及ぶ高性能爆弾が灰色のドーム目がけて落下運動を始めた。最初の1発はドームの天蓋を破り、爆発した。次々と爆弾は落下し、轟音を唸らせ、大きな火柱が上がった。

ロンドンはその光景を眺めていたが、正に圧巻だった。

基地はあつと言う間に大火に包まれ、その火炎の中に黒い粒のような爆弾が次々と飲み込まれ、爆発した。凄まじい轟音と大地を引き裂くような地響きが、上空にいる部隊にも伝わるようだった。

「全機、全速離脱！」誰かが叫んだ。

爆撃機が穏やかに旋回運動を始め、最後に落下した爆弾は基地の石油タンクに激突した。

その時の光景は、ロンドンは一生涯忘れられないと思った。まるで地獄の咆哮のようだった。耳を塞ぎたくなるような爆音が当たり一面に響き渡り、基地全体が炎の渦に包まれた。爆発は絶え間なく続いたかと思った。炎の渦は衰えを知らず、まるでソドムとゴモラを包んだ火災のように、天までも焼き尽くすかと思われた。

ロンドンの気が付いた頃には、部隊はすでに北海の上空にいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3446m/>

---

爆撃指令

2011年11月30日14時45分発行